

山野之風致、其下撒枯松葉、是謂敷松葉、松葉貴赤色、所々雖有之、近江勢多山出者爲宜、其葉長大而其色淡紅也、土人携來賣京師、

〔伊豆海島風土記下產物〕松 大木アリ、專ラ漁舟ヲ造、木性最堅シ、然ルニ白蟻ト云ヘル虫好テ食フ、故ニ家財ニ用ヒズ、木フリ、葉形ハ海風ニナレソダツユヘ、リキミアリテ見ルニタレリ、

此木船具ノ用ニ專ラナル故ニ、土人勤テ植養ト云ヘドモ、汐風烈シキ故ソダチ難シ、木性モ下品也、

〔林政八書〕山奉行所公事帳中

一松木之儀、船楫木、舂とくす、砂糖車之冠基木、加治炭、大薪木相用、肝要成御用木候間、取調候砌、其見合尤候、將又大薪木之儀、木數太分伐取、殊御急用之節は、素生玄らべ方不罷成、且取出候人夫、並積渡候船間等にも不勝手有之候間、毎年十二月各間切、百姓男女打立所之檢者、山奉行筆者さはくり以下之役々、前お忍か人迄罷出、致下知翌年中上納分、津口へ取出置、時節見合、積渡候は、諸座御用、又は百姓農時之故障無之可宜候條、向後右通可申渡事、

松名木

〔本草一家言三〕連理松 山谷有戲答陳季常寄黃州山中連理松枝詩、

五雜俎曰、段成式云、欲松不長、以石抵其直下、使不必十年方偃、然亦不盡然也、凡松髡其頂、則不復長、旁幹四出、久即偃地矣、京師報國寺有松七八株、高不過丈許、其頂甚平、而枝幹旁出、至十餘丈者、數百莖、天矯如游龍、然寺僧恐其折、每一幹以一木支之、加丹堊焉、好事者携酒上其頂、盤居群座、此亦生平所未嘗見也、

〔古今要覽稿草木〕連理松

連理松は一根に雌雄交り生ずと本草一いへり、攝津國有馬郡香下村攝陽矢田部郡駒林村上同等群談にあり、みな一根にして二幹となり、雌雄交り生じたり、また信濃國上田にも此松あり、土人相生